

と民主政)の維持・発展を主張する彼女にとってホップズはミルトンやとりわけ(『市民政府論』)のロック以上ではなかったことはその『イングランド史』の該当部分の叙述からもうかがえるように思った。(金沢大学教養部教授)

ペレストロイカとプレハーノフ Perestroika and Plekhanov

坂 本 博
SAKAMOTO Hiroshi

最近、あることがきっかけでプレハーノフの後期の著作を繙くことになった。後期と言っても、正確にはプレハーノフがレーニンとの対立を深める1904年から1918年に病没するまでの著作のことである。1914年の第一次世界大戦勃発までのプレハーノフの政治論文はプレハーノフ著作集(1920~27年)に収められている。しかし、それ以降の著作はこの著作集にはないので、個々の論文や著書に当たるしかない。この時期の著作の内、古典資料センターのベルンシュタイン=スヴァーリン文庫には、プレハーノフの論文「戦争再論」を収めた論文集『戦争』(1915年)、1917~18年のプレハーノフの論文を集めた『祖国での一年』全二巻(1920年)、パンフレット『モスクワ国家協議会での演説 歴史的検討』(1921年)が所蔵されている。

さて、そのきっかけは何かと言うと、それは去年(1990年)、『アガニョーク(灯)』誌(第47号)に掲載されたアレクサンドル・ツイプコのインタビュー記事であった。ツイプコについては拙稿「ペレストロイカにおける思想状況——アレクサンドル・ツイプコを中心に」を今年度の『富山国際大学紀要』に書いたので、興味がおありの方は参照していただきたい。ツイプコは「ポリシェヴィズムに注意」と題されたこの記事の中でプレハーノフとポリシェヴィキを区別し、革命の際のプレハーノフの立場を擁護している。ポリシェヴィキが革命の中で大衆に迎合したのに対し、プレハーノフは「労働者に向かって自分の信念に矛盾したことを言い、彼らに取り入ることができなかった。正常な人間である彼は、いかがわしい本能を大目に見たくなかった」とツイプコは述べている。このようなツイプコのプレハーノフ擁護論は従来のソ連におけるプレハーノフ評価とは本質的に異なるものであった。これまでのプレハーノフはレーニンを基準にして評価され、レーニンと対立してからのプレハーノフの立場は否定された。それだけに、ツイプコのこの発言にはペレストロイカの時代の息吹を感じさせるものがあり、感慨深かった。

しかし、実は、最初に述べたプレハーノフの後期の著作を繙くきっかけになったのは、このインタビュー記事の内容ではなかった。そのきっかけは、この記事に添えられた写真だったのである。そこにあった二枚の写真の内、一枚はレーニンが集会で演説している写真で、演壇の脇にはトロツキイが立っている。これはかつてトロツキイがそこに存在しないかのように偽造されたことがある、いわく付きの写真である。しかし、問題はもう一枚の写真であった。それは最近の写真で、デモ行進の様子を撮ったものである。デモ隊は横断幕を掲げている。そして、そこには「一党の独裁は一人の独裁に終わる プレハーノフ」と書かれてあった。この

写真を見た瞬間、ブレハーノフは一体どこでこれを言っていたらうかと思案した。しかし、どうも思い当たらない。「一党の独裁は一人の独裁に終わる」。まるでスターリンの独裁を予言するような言葉をブレハーノフは果たして述べていたらうか。しかし述べていたとすれば、レーニンを始めボリシェヴィキとの対立が激化していた時期に違いない。こう考えて1904年以降のブレハーノフの著作に当たってみることにしたのである。

ところが、この言葉はなかなか見つからなかった。1904年の論文「中央集権主義かボナパルティズムか」にはレーニン一派が「プロレタリアート独裁をプロレタリアートに対する独裁と取り違えているようである」というブレハーノフの言葉があるが、これを出典とするには少々無理がある。ここには個人による独裁という言葉はないからである。ブレハーノフの最後の論文になった「初歩のいろは」（1918年）で、ボリシェヴィキの「独裁は勤労住民の独裁ではなく、その一部分の独裁であり、一グループの独裁である」という言葉を彼は残しているが、これも「一グループの独裁」であって「一人の独裁」ではない。1904年から1918年までの著作に一応目を通したが、ついに横断幕の言葉は見つからなかった。一体これはどういうことだろう。あの横断幕を作った人たちはブレハーノフの言葉を捏造したのであろうか。釈然としない思いが胸の中にわだかまった。

こういう気持ちほどたちの悪いものはない。いつも気になって、落ち着かない。しかし、このわだかまりを晴らす糸口にととうと思いついた。それは1989年6月1日の『論拠と事実』紙に掲載されたチュチュキン論文「最初のロシアのマルクス主義者」である。チュチュキンはソ連史研究所の主任研究員で、ブレハーノフ研究者として知られている。チュチュキンはこの論文で、ブレハーノフはボリシェヴィズムに対置できる代案を持っていたかどうかという問題を提起し、ブレハーノフの代案は「一定の階級勢力と党に支えられた現実的な代案」ではなかったとし、ブレハーノフは「大衆の気分と期待に即した綱領を民衆に提起できなかった」という結論を下している。

勿論、チュチュキンのこの結論自体は何の糸口にもならない。糸口になったのは、スターリン主義を予言するようなブレハーノフの言葉が引用された論文の最後の箇所である。この引用は先ほども触れた1904年の論文「中央集権主義かボナパルティズムか」からなされている。それをそのまま引用しよう。レーニン派の「中央委員会はどこでも彼らに反対するすべての不満分子を『解散』させ、どこにも自分の手先を送り込み、すべての委員会をこれらの手先で満たしてから、大会における極めて従順な多数をやすやすと確保する。中央委員会の手先で構成された大会は、委員会に『万歳』を仲良く叫び、成功不成功を問わずそのすべての活動に同意し、そのすべての計画と新事業に拍手を送る。そうになると、実際、我々の党には多数派も少数派もない。なぜなら、そうになると、我々のところにはペルシアのシャーの理想が実現するだろうからである」。また、チュチュキンはそれから少し後の箇所も引用している。「もし我が党が、実際に、自らをそのような組織になるのに任せるなら、たちまち党の隊列には賢明な人々にも筋金入りの闘士にも居場所がなくなってしまうであろう。党には、ついには望ましい王様を受け入れた蛙どもだけが残るであろう。その王様とは、何にも妨げられることなくこれらの蛙どもを嚙み下す『中央委員会の鶴』である」。これらのブレハーノフの言葉は、チュチュキンも認めているように、スターリン主義を予言するものであった。あの横断幕のスローガンはこれらの言葉に基づいて書かれたのではなかったらうか。

しかし、やはり引用文を厳密に読んでみると、ブレハーノフはスターリン主義の傾向は確か

に指摘しているが、「一人の独裁」を予言してはいない。ベルシアのシャーの例も比喩的な表現であって、「一人の独裁」をもたらすメカニズムを意識している訳ではない。プレハーノフの念頭にあるのは、あくまでも「中央委員会の独裁」である。この意味では、彼にとってスターリンの個人崇拜は余りにも想像を絶することであつたと言えるかもしれない。

ところが、こう考えることはできないだろうか。チュチューキンの論文が掲載された『論拠と事実』は、現在、発行部数が二千四百万部、1989年の時点でも二千万部以上出していた大衆紙である。一般の読者はおそらく学者のような厳密な読み方はしない。彼らなりの読み方で、スターリン主義的な傾向に警告を発したプレハーノフの言葉を「一人の独裁」の予言あるいは警告と解釈したことは十分考えられる。彼らは自分たちの考えをプレハーノフの言葉の中に読みとり、プレハーノフを自分たちの考えの表現者と見なしたのではないだろうか。このように考えると、実際にはプレハーノフの言葉ではないにもかかわらず、彼の言葉として横断幕に書かれたスローガンの謎が解ける。

また、このように考えると、このスローガンに反映された現在の大衆の意識の一面も浮かび上がってくる。彼らが注目したのは、チュチューキンによって引用されたプレハーノフの言葉そのものであって、プレハーノフの代案は「現実的な代案」ではなかったとするチュチューキンの見解ではなかった。全体的にはプレハーノフに否定的なチュチューキンの論文から、彼らは自分たちの考えの表現者としてのプレハーノフを取り出してみせたのである。「一党の独裁は一人の独裁に終わる」というスローガンは、ペレストロイカで動き始めた大衆のこのようなバイタリティを物語っているとと言えるかもしれない。

これまで述べてきたことを裏付けるものは何もないし、また論証すること自体不可能である。しかし、このように自分なりの仮説を立てることで、少なくとも心にわだかまっていたものはなくなった。おそらく、これでよしとすべきなのだろう。 (富山国際大学人文学部講師)

エルヴェシウスと『精神論』事件 (1758-1759) Helvétius et 《L'affaire de l'esprit》

森村敏己
MORIMURA Toshimi

エルヴェシウスの最初の作品である『精神論』(De l'esprit)の出版事情は複雑なものである。当時、フランスでは検閲制度のため、どのような出版物も事前に検閲を受けることを義務づけられており、公然と絶対王制やカトリック教会を批判する作品の出版は許されなかった。このため、フィロゾフたちは国外で出版したうえでフランスに持ち込む、あるいはパリで印刷しながらも外国出版を装うなどの手段で、厳しい検閲を免れようとしていた。ところが、『精神論』は正規の手続きを踏み、検閲を通過しながら、出版直後から激しい非難にさらされることになる。

『精神論』の検閲を担当したのは、テルシエという人物だった。彼は外務官僚という職務柄、外交問題を論じた作品の検閲を行った経験はあったものの、哲学や神学に関しては素人に等し